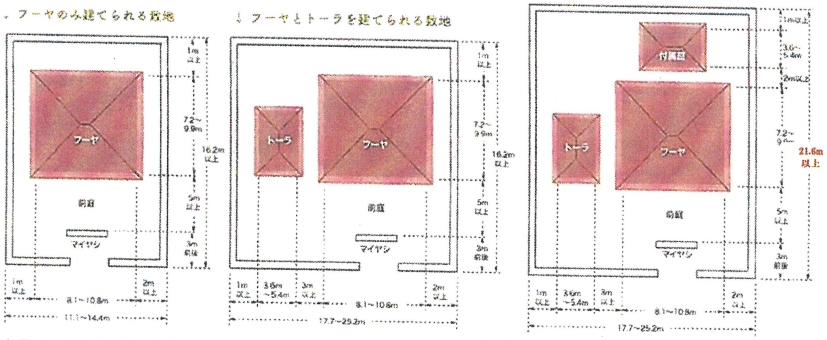
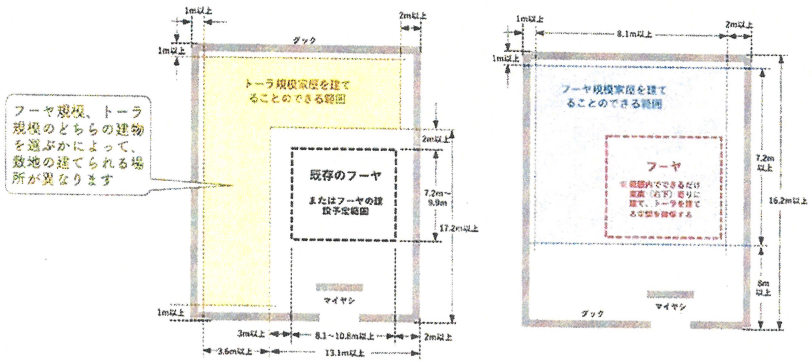
↓フーヤのみ建てられる敷地　↓フーヤとトーラを建てられる敷地

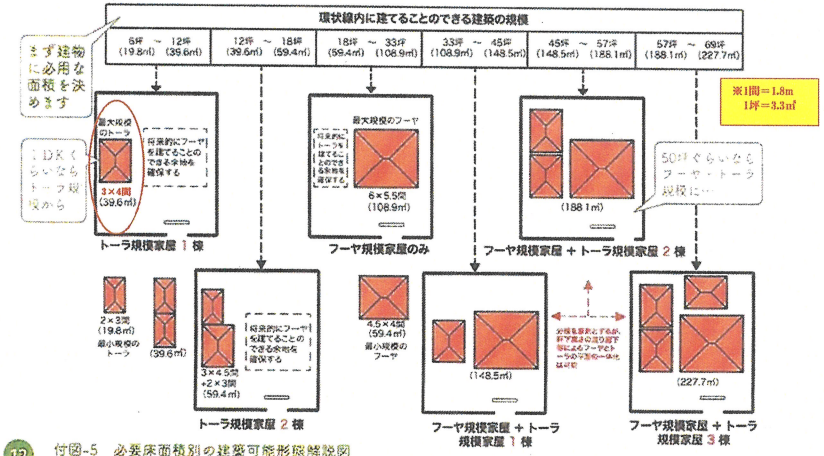


付図-2　敷地の規模・形状からみた建てることのできる建築の規模と配置

フーヤとトーラ、付属屋を建てられる敷地



付図-3　フーヤ規模家屋およびトーラ規模家屋の建築可能範囲



付図-5　必要床面積別の建築可能形態解説図

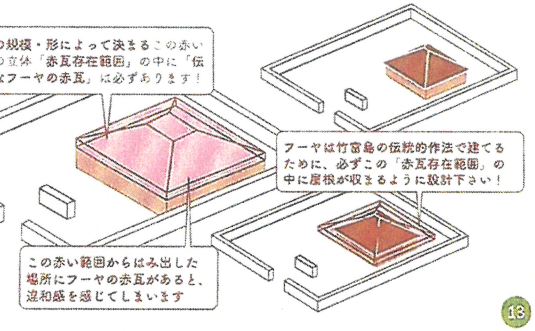
別表-4　屋敷地に関する伝統様式と景観形成基準（p.16の基準表「外構等」に関する部分以外）

基準項目		伝統様式	景観形成基準	
			伝統的な地割の屋敷地	伝統的な地割ではない環状線内の屋敷地
屋敷地の形態 「屋敷地」の定義：建物を建てる敷地。石垣外面（道路境界）内側	地割り	基本的には、十字に交差した道路によって区切られた東西方向に長い長方形の区画が2～3個の屋敷に分割され、それが連続する構成。ナビンドー沿道や地形、歴史的経緯によって固有の配置形式をとる例もある	●現状（伝統的な地割り形状）を維持する（分筆、合筆しない） ●可能な場合は、接する道路を失対事業による拡幅以前（昭和30年代）の道幅に戻す	●伝統的な地割り形状となるように造成する ●環状線内側に接する敷地は樹林（緑地帯）とし、屋敷の建造物や石垣を環状線に露出させない ●屋敷から環状線へ直接開口を設けない
	グック／屋敷開口	フーヤ正面（南側）にただ1つ入口をとり、マイヤシを置いて屋敷と道路を結合させる形式。開口幅は2m程度（最大で1.4間≒約2.5m）	●グックおよび開口部の位置・幅・高さ等の履歴を調査し、オリジナル（直伝建設定時以前）の状態に復原する ●履歴が分からない場合は、開口部はフーヤ正面の南側に１つだけとし、グックが欠けている敷地境界は伝統的な形態のグックで復元する	●敷地の四周を石垣で囲み建物を直接接道させない ●グック開口は幅3.5m以内で南に1つのみとする
屋敷規模と建設可能家屋（付図-2,3,5参照）		石垣に囲まれ、フーヤ（屋敷中央東寄り）とトーラ（屋敷西縁）の2棟によって構成される屋敷構成。シヌヤやアサギを配する場合もある	●敷地の履歴を考慮した建物配置とする ●履歴が不明な場合は、屋敷地の規模に応じて建てられる建物を下記のとおり誘導する（付図-2,3,5参照）	●「最小のフーヤ規模家屋も建てられない狭い屋敷地」には、建物を建てない ●屋敷地の規模に応じて建てられる建物を下記のとおり誘導する
建物配置	フーヤを建てられる範囲	伝統的配置（付図-4,5参照）	●建物壁面と石垣との空間および前庭・マイヤシを確保できる配置とする（付図-3参照）	
	トーラを建てられる範囲	伝統的配置（付図-4,5参照）	●フーヤの無い屋敷では、将来的にフーヤを建てる場所を確保して伝統的配置を守る。他の棟との隙間間隔は3m以上（付図-3,5参照）	
	フーヤだけしか建てられない狭い屋敷	東西11.1m ～ 14.4m 南北16.2m以上	●伝統的な配置でフーヤのみ建てる	
	フーヤとトーラを建てられる標準的屋敷	東西9間(16.2m)以上南北9間(16.2m)以上	●伝統的な配置でフーヤとトーラ（またはフーヤのみ、トーラのみ）を建てる	
	フーヤ北側に別屋を建てられる広い屋敷	東西6間(10.8m)以上南北12間(21.6m)以上	●フーヤとトーラを建てた後にそれ以外の付属屋を伝統的な配置で建てることができる	
屋根平面形態	フーヤ　最小平面規模	東西4.5間(8.1m)×南北4間(7.2m)	●伝統家屋フーヤの平面および屋根の大きさ（屋根伏せ）の範囲内とする。 ●東西方向を南北方向より半間（約1m）または1間（約2m）長くして大棟の長さを揃える	
	フーヤ　最大平面規模	東西6間(10.8m)×南北5.5間(9.9m)		
	トーラ付属屋　最小平面規模	長辺3間(5.4m)×短辺2間(3.6m)	●伝統家屋トーラの平面および屋根の大きさ（屋根伏せ）の範囲内とする	
	トーラ付属屋　最大平面規模	長辺4間(7.2m)×短辺3間(5.4m)		
	超フーヤ平面規模家屋	なし	●波り廊下等を用いてつくることができるが、個々の屋根が伝統的なフーヤやトーラの屋根規模を超えない分棟形式とする	
マイヤシ	セットバック	南側道路境界から3m程度	●伝統様式に従う（伝統的配置に設けることができる）	
	高さ	1.2～1.5m程度（グックの場合）	●グックの場合は伝統様式に従う ●各戸が振向を凝らしたものも認める	
前庭	奥行（南北方向）	4.5～5.5m程度	●伝統様式に従う（付図-2参照） ●伝統的規模（「世乞い」の巻呼ができる広さ）を確保する	
	幅（東西方向）	フーヤ正面幅(8～11m)+東西それぞれ2～3m以上		

「敷地の選択と屋敷の使い方（p.10,11）」に沿って敷地を選ぶ（必要な場合は敷地を造成する）ことにより、伝統的な敷地に伝統的な配置で家を建てることができます

敷地の規模・形によって決まるこの赤い透明の立体「赤瓦存在範囲」の中に「伝統的なフーヤの赤瓦」に必ずあります！

伝統的な敷地に伝統的な配置で家を建てると、この図のように、敷地の中の限られた範囲（空間）に赤瓦屋根は配されます！



フーヤは竹富島の伝統的作法で建てるために、必ずこの「赤瓦存在範囲」の中に屋根が収まるように設計下さい！

この赤い範囲からはみ出した場所にフーヤの赤瓦があると、違和感を感じてしまいます

この自由な建築の時代に、島の先人たちが永年の暮らしの中で獲得した作法を実現することに大変ですが、それが、竹富島の美しい伝統的景観をまもりつくります！